

基礎心理学入門

第一章

心理学の歴史(1)


2009/10/08

田山 忠行

心理学史の概略

- 「心理学の過去は古いが歴史は浅い」(Ebbinghaus)
- 古代: アリストテレス、ヒッポクラテスなど
- 中世: 空白の時代
- 近世: デカルト、ロック
- 近代: ヘルムホルツ、etc…
 1. 科学的心理学独立の背景
 2. 科学的心理学の独立: フェヒナー、ヘルムホルツなど
 3. 科学的心理学の確立: ヴントの実験心理学的研究室(1897年)
- 20世紀: アメリカ(行動主義、新行動主義)とドイツ(形態主義)から認知主義へ

古代

- 精神=心=靈魂=真の知識 ←身体に比べ様々な呼ばれ方
 - 以後、精神の座は心臓
- アリストテレス (Aristotle) (384-322B.C.)
 - 心身一元論
=質量と形相(肉体と精神)は同じ
 -  心身二元論 (Plato)
- ヒッポクラテス (Hippocrates) (460?-377B.C.)
 - 医学の父、理性の座は脳であると考えた。(Platoと同様)
 - 精神の病について考察
- ガレヌス (Galenus) (130-200)
 - 三種の精気: 動物的精気・生命的精気・精神的精気 (= 靈魂)
 - 食べたものは胃で動物精気になり、心臓で生命的精気になり、脳で精神的精気になると考えた。
- アウレリウス・アウグストゥス (Aurelius Augustinus) (354-430)
 - 靈魂と身体の二元論、内省
 - 靈魂の不滅 → 靈魂は神の息吹である。

中世

- 空白の時代
- アルハーゼン (Alhazen) (965-1038)
 - アラビアの心理学
 - 視覚論 → ヘルムホルツに影響を与えた。

近世(1)

- 近代科学の根は物理学にある

Cf. プラトン

- 理性主義 (rationalism)

- 理性は生得的なものと考える



経験主義

- デカルト (Descartes) (1596-1650)

- 真の知識を得るために全てを疑う
- Cogito ergo sum (我思う、ゆえに我あり)
- 心身二元論 → 思惟と肉体は別である。

- スピノザ (Spinoza) (1632-1677): 二面一元論

- ライプニッツ (Leibniz) (1646-1716): 予定調和説

- ヴォルフ (Wolff) (1679-1754):

- 心知学 (psychosophy) → 心理学 (psychology)

近世(2)

- 経験主義 (empiricism)

Cf. アリストテレス

- 生得的なものはないと考える

- ホッブズ (Hobbes) (1588-1679)

- 「レヴァイアサン」

- ロック (Locke) (1632-1704)

- 生得的観念の否定 → “白紙で生まれる (tabula rasa)”
- “観念”の由来は経験であるとした。

- バークレー (Berkeley) (1685-1753)

- 「視覚新論」... 経験による視覚の充実

近代(1)

- 科学的心理学独立の背景
- ガル(Joseph Gall)(1758-1828)
 - 骨相学(phrenology): 頭蓋骨の形によって個人の能力が決まる。
→ 大脳機能局在説のはしり(良く言えば)
- ミューラー(Müller)(1801-1858)
 - 生理学の視点から、特殊神経エネルギー説をとらえた。
 - 感覚には、それぞれに対応するエネルギーがある。
 - → 現代の知見では部分的に正しいところもある。
- メスメル(Mesmer)(1734-1815)
 - 催眠術、動物磁気。磁石を用いて催眠術を行った。
- ダーウィン(Darwin)(1809-1882)
 - 発達、動物心理学の祖、ともいえる？
- モーガン(Morgan, 1852-1936)の公準
 - 「低次のプロセスで説明できることは、高次のプロセスで説明するべきではない。」

近代(2)

- 科学的心理学の独立
- フェヒナー (Fechner) (1801-1887)
 - 精神物理学 (psychophysics) = 心理物理学
 - 「精神物理学原論」著
 - 感覚の大きさを物理的に測定する。物理と精神の橋渡し
- ヘルムホルツ (Helmholz) (1821-1894)
 - 視覚の神経伝導速度の測定、三原色説、聴覚説、無意識的推論など。現代に繋がる理論が多い。

近代(3)

- 科学的心理学の確立
- ヴント(Wundt)(1832-1920)
 - 世界初の心理学実験室を設置した
 - 心理学とは、意識・こころという全体を分析し、要素にすることで、どのように構成されているかを知るための学問とした。
→方法として、内省(内観)をとる
 - いわば意識心理学
 - その後、かれへの批判から様々な主義が生まれた
- 要素 →全体主義(ゲシュタルト心理学)
- 構成 →機能主義
- 内省 →純粹内省主義
- 行動主義へ

近代(4)

- ドンデルズ (Donders) (1818-1889)
 - 反応時間の測定、減算法
- Aubert (1826-1892)
 - 視覚研究
- ヘリング (Hering) (1834-1918)
 - 反対色説
- Exner (1846-1926)
 - 仮現運動研究
- Brentano (1838-1917)
 - 作用心理学
- マッハ (Mach) (1838-1916)
 - 「感覚の分析」
- エビングハウス (Ebbinghaus) (1856-1969)
 - 記憶研究、無意味綴りの使用

19世紀末

- ゴールトン (Galton) (1822-1911)
 - 遺伝研究、個人差研究
 - 弟子筋にピアソン (ピアソンの相関係数)
- ビネー (Binet) (1857-1911)
 - 知能検査、IQ
- ジェームズ (William James) (1842-1910)
 - アメリカの心理学の創始者といえる。
 - 「心理学原理」著 (1870)
 - 意識の流れを重視した。情緒研究なども行っている。
- ティティナー (Titchener) (1867-1927)
 - 構成主義、純粹内省主義